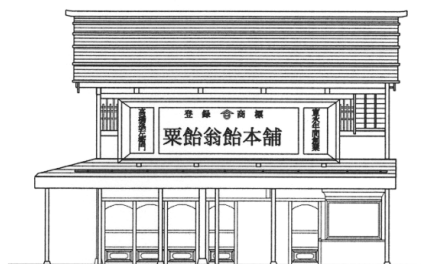
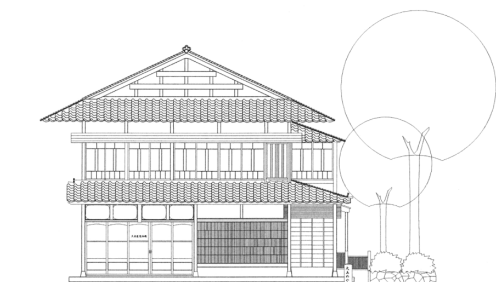


歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書

～歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりへ向けて～



平成 14 年 3 月

上越市創造行政研究所

はじめに

近年、全国の自治体において、歴史的な建物の保存・活用や、歴史的な建物を町並みの核として個性的な都市景観を形成しようとする取組みが活発に行われるようになってきました。これらは、自分達が暮らすまちの自然・風土・歴史を色濃く反映している歴史的な建物を、従来の文化財としての保存だけでなく、地域固有の資源として再評価し、将来に向かってのまちづくりに役立てようとする試みであるということが出来ます。

このような歴史的な建物のまちづくりへの活用は、本市においても大きな課題となっています。

本市は、越後国府の時代から千年余の歴史が息づくまちであり、多くの歴史的資源に恵まれています。しかも、広い市域には、城下町高田と港町直江津という全く性格が異なる都市部と、東部田園地域や西部中山間地域という農山村部が含まれ、現存している歴史的な建物の種類も多岐にわたっています。これらの膨大かつ多種多様な歴史的な建物をどのように保存し、まちづくりの中で活用していくかは、これからのまちのアイデンティティの形成に関わる大きな問題であるということが出来ます。

一方、我々のライフスタイルの多様化や、まちの近代化に伴い、歴史的な建物が次々と姿を消しているのも現実です。もう少し早く建物のよさに気付いていたなら、ほんのわずかのサポートがあったなら、残ったであろう建物もたくさんあったはずです。このように歴史的な建物の保存・活用は緊急の課題であるということが出来るでしょう。

このような課題に対して、これまで本市では、文化財の調査や保存、市史研究、文化振興、景観形成などといった様々な分野から取組みを行ってきました。また、市民の間でも地元を心から愛する郷土史研究者や建築家などの皆さんがそれぞれの立場から熱心に活動に取り組んでこられました。

当研究所では、以上の経過を踏まえ、今後これらの取組みがお互いに連携し合い、歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりという総合的な取組みとして、一層効果的に推進されていくことが必要であると考え、本調査を実施しました。

調査の実施に当っては、専門的な見地からの助言や指導をいただくため、東京大学大学院工学系研究科建築史研究室の藤井恵介助教授に特別研究員として参画いただき、また、同研究室の大学院生の皆さんからも実地調査や専門的な文献調査の面で協力いただきました。また、まちづくりの主人公は、まちで暮らす市民であるとの認識から、市民研究員制度を活用し、6名の市民の皆さんに調査に参画いただきました。

この調査報告書は、平成13年4月から平成14年3月までに実施した調査・研究の成果を報告書にまとめたものであり、大きく分けて2部構成となっています。

第1部では「歴史的な建物と景観を活かしたまちづくり」というテーマで、市民研究員から実際にまちを歩いていただき、そこで見聞したことや、既存の調査研究報告などについて、市民研究員自身の調査レポートとしてまとめていただきました。第1章は、市内に現存している歴史的な建物を14のテーマ別に調査報告したもので、それぞれのテーマごとに、現存している建物やそれらが置かれている現状を整理し、調査担当者としての今後の展望をまとめていただきました。また、第2章では、現地調査の結果を踏まえ、調査担当者の中で歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりのあり方を議論した結果を提案としてまとめました。

第2部では、「上越市の歴史的建造物の調査報告」というテーマで、藤井助教授をはじめ、東京大学の皆さんから市内にある歴史的な建物の中でも特に重要と思われるものについて、その価値を明らかにし、記録保存するために行った現地調査の結果をまとめていただきました。また、さらには、今後の歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりにつながるように、141軒にわたる建物リストも収録してあります。

多様な自然環境と、多彩な都市の要素を含む本市において、歴史的な建物は、当初の予想を上回る種類と数が現存し、本調査においてもその全体像の把握までには道半ばの感があります。本調査の実施を一つのきっかけとして、今後市民の皆さん、各分野の専門家、行政の三者が連携を密にとりながら、歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりの取組みが進められていくことを切に願うものです。

また、本調査については、本年度の当研究所の自主研究事業として、市民研究員制度と特別研究員制度を活用して実施し、情報収集から報告書執筆まで市民研究員という市民の代表と、特別研究員である藤井助教授をはじめとする専門家の皆さんとの共同作業で進めてまいりました。このように、まちづくりの主役である市民の皆さんが、専門家や行政の担当者と共にまちの現況や課題を調べ、将来のまちの姿について議論し、その成果を一冊の報告書として取りまとめることができたことは、歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりの新たな1歩を踏み出すことができたものであると自負しておりますし、市民本位のまちづくりを進めていく上で画期的なことではないかと思われまます。本調査に参画いただいた市民研究員の皆さんが、今後の歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりをリードしていく役割を担っていただければ望外の喜びです。

本調査の実施に当っては、大変多くの方々により支えられてまいりました。的確かつ熱意あふれるご指導をいただいた藤井助教授、精力的に調査に取り組んでいただいた東京大学の大学院生の皆さん、各々が日常の仕事に携わる傍ら熱心にまちを歩き、まちの将来について熱く語っていただいた市民研究員の皆さん、それぞれの分野からアドバイスをいただいた市内の専門家の皆さんや市関係機関、そして、何よりこの調査に快くご協力いただいた建物の所有者である市民の皆さんにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

注)

今回の調査は、より広い範囲で市内の歴史的な建物の現況把握を中心に行ったものであり、個別の建物についての保存・活用計画の策定や、指定・登録を目的としたものではありません。

平成14年3月
上越市創造行政研究所

目次

調査要領	1
序 歴史的建造物の保存・活用へ向けて（特別研究員：藤井恵介）	5
【第1部】 歴史的な建物と景観を活かしたまちづくり（市民研究員との共同研究報告）	7
第1章 上越市内の歴史的な建物	9
1-1 歴史的な建物からみたまちの姿	11
1-2 直江津地区	13
1-2-1 直江津の町家と座敷蔵	17
1-2-2 土蔵造りの寺院	21
1-3 高田地区	23
1-3-1 高田城址	27
1-3-2 旧家中（武家屋敷）地域	31
1-3-3 高田の町家	39
1-3-4 高田の雁木	43
1-3-5 寺町の寺院群	51
1-3-6 陸上自衛隊高田駐屯地	53
1-4 その他地区	55
1-4-1 頸城地方の農家住宅	57
1-4-2 旧街道沿いの町並み	61
1-5 テーマ別	67
1-5-1 西洋風な建物	69
1-5-2 近代RC建築	79
1-5-3 鏝絵	81
1-5-4 銭湯	83
第2章 歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりへ向けた提言	85
2-1 歴史的な建物をめぐる現状と課題	87
2-1-1 現況のまとめ	87
2-1-2 問題点の整理	87
2-1-3 今後の課題	89
2-2 歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりへ向けて	91
2-2-1 歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりのあり方	91
2-2-2 歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりへ向けた課題	97

【第2部】 上越市の歴史的建造物に関する調査報告	103
(東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻 建築史研究室による調査・研究報告)	
第2部目次(再掲)	105
序章 調査の経過と概要	107
序 1 調査の経過	109
序 2 調査の主旨と視角	109
第1章 高田の町家	113
1 - 1 高田と町家	115
1-1-1 近世の高田	115
1-1-2 町家と災害	115
1-1-3 町家の現在	119
1 - 2 町家の特徴	119
1-2-1 全体的特徴	119
1-2-2 「渡廊下」の成立	124
1-2-3 吹抜と意匠	125
1-2-4 雁木	127
1 - 3 近代・現代の改造	128
1-3-1 町家の変化	129
1-3-2 今後の課題	131
1 - 4 町家実測	133
1-4-1 高橋鉛屋(高橋孫左衛門家住宅)	133
1-4-2 大杉屋(大杉屋惣兵衛家住宅)	140
第2章 直江津の土蔵造建物	145
2 - 1 直江津の火災と土蔵造建物	147
2-1-1 火災との戦い	147
2-1-2 土蔵造とは	148
2-1-3 直江津の土蔵造建物	148
2-1-4 土蔵造の本堂	149
2-1-5 「座敷蔵」について	150
2-1-6 おわりに	150

2 - 2	土蔵造寺院実測	151
2-2-1	聴信寺本堂	151
2-2-2	真行寺本堂	154
2-2-3	林正寺本堂	157
2-2-4	観音寺本堂	160
第3章	『北越商工便覧』にみる商家	165
3 - 1	『北越商工便覧』について	167
3 - 2	商家の業種	167
3-2-1	高田地区	167
3-2-2	直江津地区	172
3 - 3	描かれた建物	173
3-3-1	間口の間数	173
3-3-2	古写真との比較	173
3-3-3	町並の姿	180
3 - 4	他の地域との比較	188
3-4-1	業種別	188
3-4-2	建物の外観	188
第4章	中ノ俣集落	191
4 - 1	中ノ俣集落にみる近代化	193
4-1-1	集落の現在	193
4-1-2	中ノ俣の農家	193
4-1-3	集落における近代化	193
4 - 2	農家実測（下室ミチ家住宅）	200
4-2-1	構造・平面	200
4-2-2	改造の経緯	200
付録	上越市歴史的建造物リスト	205
	参考文献目録	239
	図・表目録	241

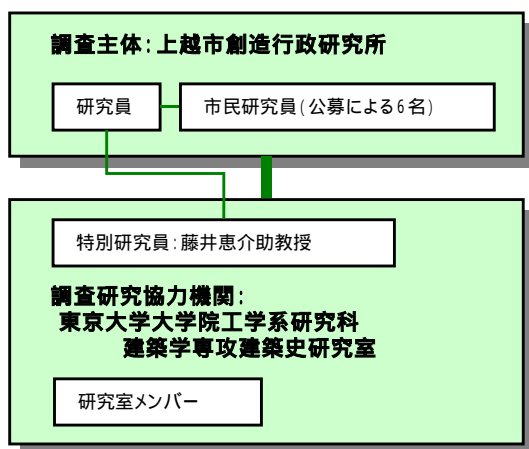
調査要領

1. 調査の目的

近年、まちの歴史を語る歴史的建造物が次々と消えていく現状をふまえ、市内に現存する歴史的建造物を把握し、歴史的な価値を明らかにした上で、保存・活用策とそれらを活かしたまちづくりのあり方を調査・研究する。

2. 調査体制

【調査体制図】



(1) 調査主体

主管

上越市創造行政研究所 (担当研究者 石黒厚雄)
市民研究者制度及び特別研究者制度による実施

市民研究者制度の活用

6名の市民を市民研究者として委嘱。

市民研究者名簿

磯田 一裕
木村 雅俊(座長)
佐藤 和夫
菅原 邦生
関 由有子
吉川 恵理子

市民研究者制度

<目的>

市民の多様な発想・発意をまちづくりや各種の行政課題に対する施策立案に活かすとともに、開

かれた市政及び市民参加型のまちづくりを推進する。(当研究所の基本機能の一つである人材育成機能、「開かれた研究所」の推進)

<活動内容>

市の行政課題等に関する研究テーマの研究スタッフとして当研究所研究者と協力し、資料・文献調査や実地調査、専門家へのヒアリングなどを実施するとともに、定例会議への出席や調査・提言内容を取りまとめた報告書の作成等を行う。

<担当テーマ>

以下の2テーマを設定。

「歴史的な建物と景観を活かしたまちづくり」
研究成果 歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書(本報告書)

「上越市の観光の現在と未来」(観光部門)
研究成果 上越市における観光の現状と新たな観光振興策に関する調査報告書

<研究者の選定>

満18歳以上の市内在住・在勤・在学者を対象とした公募を行い、書類選考を経て市長より委嘱。

<活動期間>

平成13年7月12日～平成14年3月31日

当調査における役割

- ・市内の歴史的な建物に関する情報収集(現地踏査、ヒアリング、文献調査)
- ・歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりに関する議論と提言
- ・報告書の執筆

特別研究員制度の活用

東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻
 建築史研究室 藤井恵介助教授に特別研究員として
 参画を依頼

当調査における役割分担

- ・専門的見地（主に建築史）からの調査・研究への助言
- ・報告書の執筆

当調査における役割分担

- ・専門的見地（主に建築史）からの調査・研究の実施（高田の町家、直江津の土蔵造り寺院群、中ノ俣集落を中心に）
- ・専門的見地（主に建築史）からの助言・協力
- ・報告書の執筆

【役割分担】

	市民研究員	東京大学
ヒアリング		
実測調査	調査協力	
文献調査		

(2) 調査研究協力機関

東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻
 建築史研究室

参加者名簿

藤井恵介（助教授）	崔ゴウン
角田真弓（技術官）	中村琢巳
李 明善（以下大学院生）	飯尾公美子
松山 恵	大林 潤
松本裕介	鈴木理考
山本紀子	ヤン・シアオティン

3. 調査期間

平成 13 年度

（平成 13 年 4 月 1 日～平成 14 年 3 月 31 日）

4. 調査経過

下表のとおり。

【調査経過】 平成 12 年 11 月 17 日事前調査を実施(藤井助教授)

日時	担当	活動内容	内容
6月18日(月) ～22日(金)	東京大学	現地調査	・現地調査を実施 建物実測調査 (高橋孫左衛門商店、大杉屋惣兵衛、下室ミチ邸) 現地調査(中ノ俣集落)
7月12日(木)	市民研究員	定例会議	・委嘱状交付 ・作業内容の確認(調査の全体計画等の説明)
8月10日(金)	市民研究員	定例会議	・歴史的建造物の保存・活用の意義についてのディスカッション ・調査方法に関する意見交換 以降、現地調査の実施(～平成14年1月まで)
9月6日(木)	市民研究員	定例会議	・市内にある歴史的な建物の事例発表
9月28日(金)	市民研究員	定例会議	同上
10月15日(月) ～18日(木)	東京大学	現地調査	・現地調査を実施 土蔵造り寺院実測調査 (聴信寺、真行寺、林正寺、観音寺) 高田町家現況調査 (本町、南本町、大町、東本町) 以降 報告書執筆準備開始
	市民研究員	東大現地調査への協力	・東京大学建築史研究室(藤井助教授ほか)による現地調査へ協力。
10月16日(火)	一同	意見交換会	・市民研究員、東京大学メンバー、都市計画課、社会教育課、文化振興課による意見交換会を実施
11月6日(火)	市民研究員	定例会議	・市内にある歴史的な建物の事例発表 ・報告書作成へむけた打合せ 以降、報告書執筆開始
12月4日(火)	市民研究員	定例会議	・各自担当テーマの中間報告 ・歴史的な建物の現状と課題に関する議論
1月9日(水)	市民研究員	定例会議	同上
1月29日(火)	市民研究員	定例会議	・各自報告書執筆担当分の提出 ・報告書とりまとめへ向けた議論
2月15日(金)	市民研究員	定例会議	・報告書とりまとめへ向けた議論
3月5日(火)	市民研究員	定例会議	同上
3月27日(水)	市民研究員	市長への報告会	・市長への報告

5. 報告書の構成と執筆分担

本報告書は、上越市創造行政研究所及び市民研究員による第1部「歴史的な建物と景観を活かしたまちづくり」と、東京大学建築史研究室による第2部「上越市の歴史的資産調査報告」から構成される。

報告内容

第1部

- 「歴史的な建物と景観を活かしたまちづくり」
- ・上越市内の歴史的な建物の現況解説（テーマ別）
 - ・歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりへ向けた提言
（理念、現状と課題の分析、今後への提案）

第2部

- 「上越市の歴史的建造物に関する調査報告」
- ・上越市内の歴史的な建物に関する研究
テーマ：高田の町家、直江津の土蔵造寺院
中ノ俣集落を中心に
（文献による研究、実測調査結果の掲載、考察）

執筆分担

序 特別研究員 藤井助教授

第1部：上越市創造行政研究所
（研究員及び市民研究員）

第2部：東京大学建築史研究室
（藤井助教授及び大学院生）

編集

総括 上越市創造行政研究所
研究員 石黒厚雄

第1部 上越市創造行政研究所
研究員 石黒厚雄

第2部 東京大学建築史研究室
藤井恵介助教授
角田真弓
松本裕介
山本紀子

序 歴史的建造物の保存・活用へ向けて

上越市創造行政研究所 特別研究員

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 建築史研究室 助教授 藤井 恵介

「文化財」という言葉には二つの印象があると思う。文化財を持っているということは、一方では貴重な宝物を持っている誇らしさであり、もう一方ではそれを大切に保存しなければいけないという厄介な義務感の双方である。

建築の文化財という時には、後者がいつも課題となっていた。特に住宅においては顕著である。釘一本打てない、という俗説が広まっていることも確かだ。例えば、

『古臭いし、汚いし、不便だからいっそのこと建替えてしまおうと思っていた矢先、行政の担当者が古くて貴重なものだから大切にしてくださいと言う。文化財に指定されたはいいが、修理、改造も自由がきかず、せっかくかまどを壊してステンレスのシステムキッチンを入れたのに、それも相応しくないとわれ、もとの姿に戻されてしまった。あんなに便利だったのに…』

というのは大げさな話だとしても、これに類似した現象はここそこに転がっていた。

今回、調査対象としてとらえる歴史的な建造物や景観に関わる「文化財」は、このような困惑を全く伴わないようなものとして想定している。

「文化財」は平成8年の文化財保護法改正の際に、有形登録文化財が新たに加わり、全く新しい局面を迎えた。築50年を経過した建築であれば、個性的であったり、再現が不可能な少し特殊な意匠や技術を用いていれば、文化財として登録できる。国から維持のための補助金が出ない代わりに、修理・改造もかなり自由だ。建築に限って見るとこんな状況なのだ。しかし、実際にはもっと広げて考えることができる。目に付くも、気になるもの、こんなものをすべて「文化財」として考えることも可能だ。登録制度は文化財に関する視野を格段に広げた。

このように広がった「文化財」は、過去の結果として現在そこに在り、これから作る未来の出発点として捉えなおすことができる。

今までは、文化財と私たちの身の回りの古いものとの距離が余りにも遠かった。文化財とは大変に貴重でそのまま大切に保存するもの、身の回りの古いものは適当に処分して新しいものに買い換えるもの、だった。

建築についてもそれは同じ状況であった。しかし、後者に僅かでも価値を発見することができるならば、それを積極的に評価して、出発点として位置づけることができる、これが重要なことではないだろうか。そうでなければ、全国すべての地域が個性を失った画一的な町になってしまう。全国どこに行っても同じ表情、あるいは無表情の町が待ち受けている、という状況になってしまう。過去を評価しない町には、未来に作るべき町の指針も発見できない、というのが実際のところではないだろうか。

今年度、上越創造行政研究所が主催した本調査は、東京大学の建築史研究室（藤井研究室）と上越市在住の有志からなる市民研究員の共同作業として行われた。

東京大学のチームは、専門的な立場からの調査を実施し、市民研究員は上越市内に住み続けるなかで、気になっている様々な建築・景観その他の調査を実施した。双方は、立場が異なるものの、町を作り上げている歴史的な要素を精力的に搜索するという点において、同じ方向性を共有している。市民研究員は、より広い視野で、市内全域にわたって、多種多様な要素群を拾い上げる努力を試みた。大学チームは、焦点をいくつか絞って、詳細な調査を試みた。

数回の共同作業を持ちながら、従来の「文化財」

という枠組みを意識せず、ナイーブな感性を大切に、広く新しい視野を獲得することが、双方の調査の大きな目標であったことを強調しておきたい。

第1部で取り上げられた建築・景観その他は、市民研究員が常日頃魅力を感じ、気にしている歴史的な要素である。日常生活や仕事を進める中で惹きつけられた要素群であり、その範囲は従来の「文化財」を超えて極めて広い範囲に及んでいる。

今まで「文化財」が特殊なものと考えられていたのは当然のことであり、それは従来国の行政の枠組に強く拘束されていたからである。それが急速に拡大している現在、実際に生活をする場においてさらに広い視野をもって文化財を提案することは、地域の特性・個性を今後維持・継続・拡大していくために益々重要になって行くと考えられるのである。

本報告書において取り上げられた歴史的な建築・景観その他を、どのような施策で「文化財」として保存・活用していくのか、その方策は今後の大きな課題であるが、いずれも、更なる調査、保存、記録の必要性の高いものであることは確認しておきたいと思う。今後の都市計画、あるいはさらに広く、まちづくり全般にわたって、重要かつ貴重な資産であることを認識しておく必要を強く感じる。

最後に、今回の調査が、当初には2ヵ年の調査スケジュールの予定で始まったものの、単年度の調査に変更されたため、報告書が幾分中途段階のものとなったことをお断りしておかねばならない。

しかし、本報告書の作成に当っては、現段階における調査成果を書き付けると同時に、これから想定される調査項目や、今後明らかにすべきと考えられる項目を書き込むことにした。これは、今後行われるであろう調査や施策を拘束する意図ではなく、本年の調査を実施する中で浮かび上がってきた上越市の将来にとって重要であろうと思われる課題の項目だけでも網羅的に列挙しておきたいという意図によるものであり、中途まで調査を行った者としての責務であると考えたからである。